

提題「生と思考のテクネー」(大阪大学 中岡成文)

はじめに

小論では、西田の技術論をハイデガーのそれ(「技術への問い」と比較し、西田の無作用(または逆作用)的契機がマクロに(政治的次元で)は危険な、しかしミクロに(生と思考の個の実践の次元で)は示唆的な意味をもちうることを指摘し、<はからい>ともいうべき臨床哲学的契機に結びつけることを試みる。議論の土台となるのは、「日本文化の問題」など新版全集第9巻に収められた諸著作である。

1. ハイデガー技術論との対比

ハイデガーの技術論は西田のそれといくつかの点で比較可能である。両者の共通性は、ポイエーシスを手作業だけではなく、芸術や自然にも見て取る点であろう。もっとも、ポイエーシス的活動を、西田は「形成(創造)」と、ハイデガーは「開蔵」と捉える。ハイデガーは、近現代技術によって「用立て」られた諸事象が「用象」となり、制御や保全を含むシステムの多重性を形成することを、水力発電所の例をあげて論じているが、3.11後の展開は、原発に依存する現代の電力会社のさらに問題的な姿を明るみに出していないだろうか。

2. 技術の目的的作用性と無作用性

しかるに、このように示唆されたシステムの多重性に、西田は肉迫できていない。なぜなら彼は、技術の政治性や時代性を認め、個々人が自覚的に「歴史的創造の技師」となる主体的契機を主張する反面、技術のいわば「無作用性」(「物となって考え、物となって行う」、「世界として他の主体を包む」)を前面に出すことで、時代に対応しようとしたからである。他方ではしかし、自他に目的と道筋を明示しつつ効率を追求するテクノロジー的技術、および利潤の最大化を図る資本主義の論理が幅を利かせている現代社会でも、西田のいう世界の個物的多としての<技術者>が、「自己自身を絶対の他に於て有」ち(無作用的作用)、その絶対他者からの働きかけを受けとめつつ、さまざまに工夫を重ねることは可能だと考えられる。

3. <はからい>としての技術

提題者は、重度の障がいや難病とともに生きる人々の細かいニーズに柔軟に対応しようとする、「福祉ものづくり」のプロジェクトに接して、技術とは、私たちの在り方・生き方・交流に直結するものであることを学んだ。ビジネスの論理に乗りにくいその精神は、「用立て」の広がりにも部分的にでも抗しつつ、西田の技術論における目的的作用型と無作用的作用型との連関を新たな文脈で見直させてくれると期待している。